

News Letter

日本精神障害者リハビリテーション学会



ともに創る、ともに暮らす

- 01 第30回岡山大会 開催報告
 - >> 学会企画シンポジウム報告
 - >> 研修セミナー報告
- 02 IPPO 賞受賞者紹介
- 03 第31回お台場大会のご案内
- 04 ロゴマーク制定のご報告

2024年03月 発行

VOL. 63



【事務局】 〒115-8560 東京都北区赤羽台一丁目7番11号
東洋大学福祉社会デザイン学部 WELLB HUB-2 20901 研究室（吉田研究室）
<https://japr.jp> Mail : japr.jimukyoku@gmail.com

01 / 第30回岡山大会 開催報告

令和5年12月2日(土)～3日(日)に、日本精神障害者リハビリテーション学会第30回岡山大会を倉敷市文芸館で開催いたしました。「暮らしのためのリハビリテーションを問い直す」をテーマに、岡山県精神科医療センター 副理事長の山田了士先生に大会長をお務めいただき、岡山県内の多くの関係団体の協力により運営いただきました。当学会の年次大会は2020年からオンラインのみの開催でしたが、今回は3年ぶりに現地開催となり、全国から500人以上が集い、対面での学びや親睦を深めました。

プログラムは、大会長講演「暮らしのために」、特別講演「なぜ「くらし」のアナキズムを考えるのか?」をはじめとして、大会シンポジウム「暮らしのためのリハビリテーションを問い直す」、学会理事会企画シンポジウム「学会30年を振り返って」、教育講演2演題、心理教育・家族教室ネットワークとの共同開催シンポジウム、学会特別研修セミナー、3つの研修セミナー、野中賞・IPPO賞受賞講演、ランチョンセミナー2演題、イブニングセミナーなど数多く開催されました。学会員が企画する自主プログラムも盛況で、多数のポスター発表・企画展示が埋め尽くす会場には活気が溢れていました。また、統合失調症からの回復とリカバリーを理解するための県民公開講座も行われ、お笑いコンビ松本ハウスの松本キック氏とハウス加賀谷氏を迎えての講演やパネルディスカッションが開催され、リカバリーのプロセスを紐解くとともに「焦らない、でも諦めない」

<開催概要>

学会名称 日本精神障害者リハビリテーション学会 第30回岡山大会

テーマ 暮らしのためのリハビリテーションを問い直す

会期 2023年12月2日(土)～3日(日)

会場 倉敷市芸文館

参加者数 532名

大会長 山田 了士(岡山県精神科医療センター 副理事長)

副大会長 武田 俊彦(公益財団法人慈圭会 慈圭病院 院長)、小林 隆司(兵庫医科大学リハビリテーション学部 作業療法学科 教授)、進藤 貴子(川崎医療福祉大学 臨床心理学科 教授)

実行委員長 來住 由樹(岡山県精神科医療センター 院長)

という回復の境地について語られていました。特別企画展示「長島愛生園にみるハンセン病の政策と医療～歴史・暮らし・人～」では、ハンセン病問題を体系的にとらえ、時代と政策の変遷を学び、現在の精神科医療の在り方にも迫る内容で、多くの人が足を止め興味深く鑑賞していました。

日本精神障害者リハビリテーション学会第30回岡山大会

県民公開講座

テーマ

統合失調症が
やってきた
お笑いコンビ 松本ハウス



次回大会は第31回東京お台場大会として、12月14日(土)～15日(日)の2日にわたり、引き続き現地開催にて開催となります。多くの皆様のご参加をお待ちいたします。



学会企画シンポジウム報告

内野俊郎（大会委員会担当理事）

学会企画シンポジウムは大会2日目に「学会30年を振り返って」とのテーマで開催されました。本学会も発足以来30年を超え、精神科医療・福祉の世界でも様々なリハビリテーション技法やシステムが導入されるようになり、30年前とは隔世の感があると感じる部分は少なくありません。しかし一方で、積み残しのままになっている課題もまた少なくはなく、本学会の役割は大きいと言えるでしょう。本学会の会員、参加者は職種、立場、年齢層の幅も大きく、これからの精神障害リハビリテーションを実践していく人たちがたくさんおられます。今後の歩みを考えていくにあたって、30年の節目で本学会の歩みや変化、今後の課題について幅広い立場からお話をうかがうことを本シンポジウムで企画しました。

ご登壇いただいたのは、本学会の副会長であり長く精神障害リハビリテーションの実践と研究に取り組んでこられた精神科医の後藤雅博氏、同じく副会長であり地域における福祉サービスに取り組んでこられた岩崎香氏、研究者の立場で精神障害リハビリテーションの効果や普及についての造詣が深い佐藤さやか氏、ご家族の立場で家族支援や精神保健福祉領域への提言などに取り組んでこられた岡田久実子氏の4シンポジストと、当事者活動やCOMHBOの立ち上げ、運営に長年取り組んでこられた宇田川建氏の5人の方々です。

後藤雅博氏からは、「つなぐ・続ける：歴史を振り返り今後の展望へ」として1990年代に我が国の精神保健福祉領域で生じた法的、技術的な変化をわかりやすく紹介していただき、リカバリー

の概念の背景や本邦における課題、さらには今後について①引き続き研究者と実践者の相互交流、相互理解の場として有効に機能すること②「精神障害者」という名称を生かす当事者の参加③リカバリーを可能にする医療・社会システム実現へのよりいっそうのコミット④そのための法人化の検討といった提言が行われました。

岩崎香氏からは、「地域の福祉サービスの変転を振り返り、学会の現在と目指す未来を考える」の演題で、初代会長の蜂矢英彦先生との縁で入会した本学会との出会いから始まり、様々な先達との交流を経て、長く尽力された大会サテライト企画が果たした役割、さらには今後の学会の方向性についての議論や地域における実践者の視点を踏まえて創造性ある研究や実践を生み出していくことに学会の役割があり、その仕掛けを考えていくことが理事会の役割ではないかという提言がなされました。

研究者としての視点でのご発表をお願いした佐藤さやか氏からは、「会員アンケートを振り返って—学会の現在と目指す未来を考える」として、2022年11月から2023年2月にかけて本学会会員を対象としたアンケート調査の結果について報告をいただきました。アンケートからは実践者



と研究者の属性を持ち、中堅クラスのキャリアを持つ会員が多かったこと、「パーソナル・リハビリ」、「心理社会的支援プログラム」、「アウトリーチ・訪問支援・ケアマネージメント」、「地域・連携・ネットワーク」といった領域や、当事者や家族との協同的な活動にも関心が深い傾向にあることが示されるとともに、若手の会員や当事者、家族の意見を学会運営に生かしていく機会や仕組みづくり、実装科学を重視する視点が必要であるという提言が行われました。

家族会の全国団体であるみんなねっとの理事長である岡田久実子氏からは、ご自身の20年以上にわたるお子様と歩んでこられた体験を通しての精神科医療の課題や本学会との交流をお話しされ、変わったこととして地域移行やリハビリ志向、福祉サービス、アウトリーチサービスの

広がり、当事者の活躍や就労する当事者の増加などを挙げるとともに、精神科医療の閉鎖性やリハビリ志向の支援の不十分さ、家族負担の大きさ、スティグマの課題などの指摘がなされ、安心してかかりたいと思える精神科医療の実現についての具体的な提言もしていただきました。

最後に登壇された宇田川健氏は、ご自身の病の体験、野中猛先生との交流などに始まり、リハビリやマイノリティと呼ばれることについての見解、さらに合理的配慮についてなど、鋭い指摘や重みのある内容を、飄々とした語り口調で話していただきました。特に、合理的配慮について「比で考えないといけない。お互いに歩みよってすり合わせることでないとダメ、折り合いは必要」という言葉には、今後の本学会運営に対しても大変示唆に富む指摘であったと感じました。

》 研修セミナー報告

樽谷精一郎（研修委員会担当理事）

報告

第30回岡山大会での研修セミナーは4年ぶりの現地開催となりましたが、無事に予定通り3つの研修セミナーと特別研修セミナーが実施できました。久々の現地開催であり、事前参加登録無しという初めての試みでしたので様々なトラブルも心配されましたが、各セミナーに70名前後の方にご参加いただきました。どの研修セミナーも非常に充実した内容でしたが、特別研修セミナーについては私樽谷から、研修セミナー1については松長委員から、研修セミナー2については浅見理事から、研修セミナー3については小野委員から報告させていただきます。

次回の第31回東京大会も研修セミナーを楽しんでいただけるように企画しますので、どうぞよろしくお願い致します。



1. 特別研修セミナー

樽谷精一郎（新阿武山病院）

<鼎談：精神障害者リハビリテーション学会発足時の「初心」と「展開」 約30年の歴史をキーパーソンが語り合う>

特別研修セミナーは、本学会創成期から本学会を牽引して来られた安西信雄先生、田中英樹先生、松為信雄先生にご登壇頂きました。

学会創立前の状況を詳しく解説頂いた後、研究会時代にデイケアの在り方や職業リハビリテーション、生活支援などを中心として熱く議論された様々な内容について、お三方の立場から振り返っていただきました。本学会誕生につながる経緯や、当時の熱気を彷彿とさせるような様々なエピソードを拝聴できました。様々な先生の様々なご尽力によって生まれた小さな一歩が、この国の精神保健福祉をも巻き込む大きなうねりとなってきた歴史をまさに目の当たりにさせて頂いたような、そんな不思議な体験でした。また、本学会に参加する我々が、これからどのように精神保健福祉に貢献していけば良いかを、強く問いかけられたように感じ胸が熱くなりました。時間が足りない気がしましたが続編も検討されているようですし、次回も是非楽しみにして頂き沢山の方にご参加頂きたいと思います。



2. 研修セミナー1

松長麻美（東京医科歯科大学）

<基礎から学ぶ精神疾患とケア>

研修セミナー1は植田俊幸先生が講師を務めてくださいました。会場には75名もの方がお越しください、大変熱気にあふれたものとなりました。研修ではまず支援とは何か、どのようにして問題（困難）をとらえていくことが望ましいか、というまさに「基礎」から始まり、疾患カテゴリごとにその症状やケアについてわかりやすく教えてくださいました。単なる知識の提供だけではなく、それに裏打ちされた具体的な対応やコツをさまざまご説明くださることで、精神医学・行動科学の治験をしっかりと学んでおくことが実効性のある支援において重要であることを改めて認識する機会となりました。研修の中で挙げられた具体的な対応例はいずれも支援の場で迷ったり、戸惑ったりした経験が思い出されるようなものであり、大変に実践的なものでした。きっと参加された皆さんは、次の日の実践から活かすことができたのではないのでしょうか。日々の「痒いところに手が届く」ような、そして支援者がエンパワメントされるようなメッセージも込められた、そのような行き届いた内容に、植田先生の熱意とあたたかさが感じられました。「困った状況になったら勉強のチャンス！」というメッセージを心に留めて今後も研鑽を重ねたいと感じた研修でした。

3. 研修セミナー2

浅見隆康（群馬大学健康支援総合センター）

<マッピングを用いた依存症支援>

研修セミナー「マッピングを用いた依存症支援」は2023年12月2日第2会場において、17:30～19:00にかけて行われました。最初に橋本望先生からマッピングについて紹介され、その後各論として、青木一真先生から目標管理シートについて、江村直樹先生から、“わたしの強み”シートについて、その使い方につき事例を下に説明していただきました。

マッピングの紹介の中で、専門的な心理社会的アプローチよりも先に患者さんの人生に関心を、医師中心から多職種支援の時代へ、などが強調されておりましたが、青木先生は看護職、江村先生は精神保健福祉職とのことで、岡山県立精神医療センターの取組みの様子的一端を垣間見た感じがしました。

患者さんの日常生活に焦点をあてた問題領域が、例えば身体と精神の健康、社会生活と友人関係など、9つ挙げられ、現在の満足度を記入した後に、「どのようなことが変わればスコアが2点上がりますか？」と尋ねている点に特に興味を感じました。

依存症を抱え、なかなか前向きに捉えることがしづらい患者さんが、少しずつ支援者と治療関係ができ、このような質問に答えることで回復への道のりが見えてくるように思われました。

4. 研修セミナー3

小野彩香（認定 NPO 法人 Switch）

<認知行動 SST を学ぶ>

講師に静岡社会健康医学大学院大学の天笠崇先生、座長に群馬大学の浅見隆康先生で行われました。認知行動 SST は、認知行動療法（CBT）、社会生活スキルトレーニング（SST）、そして問題解決スキルトレーニングの3つを統合した18セッションで構成されるプログラムです。

当日は、前半に全体概要について講演を頂き、後半に1セッションのデモンストレーションを実施しました。テーマは、認知技能モジュールの第3セッション「3C-キャッチ・チェック・チェンジ」で、役に立たない思考を捕まえて書き出せるようになる（チャッチする）を練習しました。リーダー（天笠先生）とコリーダー（大川浩子先生）、参加者①（浅見先生）、参加者②（小野）の4名で実施しました。

参加した感想は、非常に丁寧な構成であり、参加者も理解しやすいだろうと感じました。また、実践する側にも、セッションマニュアルがあり、取り入れやすさを感じました。重要なポイントは、リーダーとコリーダーの役割ですが、このスキルアップもチームで楽しく取り組めるのではないかと思います。

会場にいる60名程の皆様が、デモンストレーションを前のめりで見ている様子、終了後にこぞって板書を撮影している様子などからも、関心の高さが伝わってきました。研修セミナーでは、日頃の実践へ繋げていけるような企画を続けていきたいと思っておりますので、ぜひ来年も多くの実践家の皆様にご参加頂ければと思います。



02 / IPPO 賞受賞者紹介

実践賞委員会

》 受賞者紹介

受賞者と IPPO 賞について

2023 年度日本精神障害者リハビリテーション学会 IPPO 賞は、「(認定 NPO 法人 Switch) ユースサポートカレッジ仙台 NOTE」と「親&子どものサポートを考える会」が受賞しました。両機関の皆さまには、改めてお祝い申し上げます。

IPPO 賞は旧ベストプラクティス賞を引き継いだ実践賞であり、正式名称は Interactive Person-centered Practice and Organization (和訳：双方向性かつ当事者中心の実践・機関) です。2022 年度の IPPO 賞の選考過程では、応募機関の申請書と IPPO 賞の 10 基準^{*1}を照らし合わせ、3 機関がノミネートされました。その中から、既存の制度内では支援が届きにくい当事者をサポートしている、ユースサポートカレッジ仙台 NOTE と親&子どものサポートを考える会が選出されました。なお、両機関への問い合わせや見学を希望される方は、当学会ホームページで連絡していただけます^{*2}。

※1 <https://japr.jp/lecture/bestpractice/>

※2 <https://japr.jp/info/2023年度ippo賞受賞機関/>



ユースサポートカレッジ仙台 NOTE

ユースサポートカレッジ仙台 NOTE は、法人のビジョン「未来ある若者が希望を持ち、多様な価値観を尊重し合える well-being な社会を目指す」を実現するために、働くこと・学ぶことに不安や困難を抱えた 10・20 代の若者を対象に、進路・修学・就労に関する相談支援と居場所支援を行う事業所です。既存の制度では、精神的困難を抱える若者や複雑な背景を持つ若者、いわゆるグレーゾーンの若者が安心して相談できる事業所は少ないため、ユースサポートカレッジ仙台 NOTE は主として自主事業で彼らの生活を支えてきました。その支援内容は、利用者のストレスを基盤として、ピアの力を育む集団支援や認知行動療法、運動的活動、ボランティア的な活動、キャリア系プログラム、individual placement and support (IPS) に基づく就労支援など多岐にわたります。また、これらの支援は多様な専門背景を持つスタッフによって提供されています。さらに事業の推進に当たり、ロジックモデルを組み立て、期待される(社会的)インパクトをまとめるなど戦略だった事業運営をしてきた点も大きな特徴でした。ここでは、ユースサポートカレッジ仙台 NOTE の長所の一部しかお伝えできませんが、ここで紹介した明確なビジョン、確かな戦略、幅広い支援、それを実現してきたスタッフの存在は、ユースサポートカレッジ仙台 NOTE が IPPO 賞を受賞した大きな理由となっています。

親&子どものサポートを考える会

親&子どものサポートを考える会は、「精神障害のある親とその子どもが、安定した地域生活を送ることができるよう、その支援・サポートを図ると共に、社会に対して精神障害者やその子どもたちへの理解を深める啓発活動を行なう」ことを理念としています。具体的には、主として精神障害のある親と暮らす子の立場の方を支援しています。具体的な活動は、交流会や宿泊を伴うキャンプ、支援者向け研修や大規模な学習会など、実際の支援から啓発企画・支援者養成までを含む幅広い内容となっています。また、親&子どものサポートを考える会は制度的な裏付けがないにもかかわらず、当事者に必要とされる活動・企画にするために、ニーズ調査や満足度調査、あるいは参加した当事者からフィードバックを得るなどをして、振り返りと修正を繰り返しながら実績を積み上げてきた点も大きな特徴です。昨今ではヤングケアラーという言葉が世に出て、障害のある親を支える子ども支援が注目を浴びていますが、親&子どものサポートを考える会は2009年から、草の根的そして先駆的に活動を続けてきおり、その継続性も受賞理由の一つとなりました。

>> 2023年度IPPO賞への応募のお願い

実践賞委員会は、2024年度も多くの機関にIPPO賞に申請していただきたいと考えています。IPPO賞は長年の実績がある機関だけでなく、将来が期待できる実践やキラリと光る先鋭的な実践も表彰したいと考えています。また、IPPO賞受賞機関だけでなく、ノミネート機関もホームページで紹介します。私たちは、IPPO賞が応募機関の素晴らしい実践を全国に知ってもらうきっかけになることを願っております。つきましては、ぜひ多くの機関に応募をお願いしたく存じます。



03 / 第 31 回お台場大会のご案内

この度 2024 年 12 月 14 日 (土) ~12 月 15 日 (日) の 2 日間にわたり、東京お台場 (会場: 東京有明医療大学) において日本精神障害者リハビリテーション学会第 31 回東京お台場大会を開催することとなりました。

日本精神障害者リハビリテーション学会は、「精神障害のある人々がすべて、ふつうの市民として、地域社会の中であたりまえに暮らしていくことができるようになる、そのために必要な活動を展開すること」をミッションとして、精神科医、ソーシャルワーカー、臨床心理士、看護師、作業療法士などの多職種からなる学際的な学会です。入院医療中心から地域生活支援中心へと精神保健施策の転換が打ち出され、誰もが安心して自分らしく暮らすことができるよう、精神科医療機関や他の医療機関、地域援助事業者、市町村などの重層的な連携による精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築が現在進められています。本学会のミッションはまさにその流れに沿うもので、担う役割はますます大きくなっているものと思われま

す。第 31 回東京お台場大会のテーマは、「多様性と調和～台場シティで^{ととの}調う～」です。多様性についての議論が活発となり、様々な価値観が同等に扱われる機運があります。これを精神科医療や福祉の文脈で捉えなおすと、障害があってもなくても同じ一個人として社会や地域で、生活したり活躍したりということをもう一度考え直すということになるのでしょうか。



大会長 肥田 裕久
(医療法人社団宙麦会ひだクリニック 理事長/院長)

まず、今回の学会テーマをこのように掲げました。さらにもうひとつテーマを織り込んでいます。この多様性の実現のためには日々の業務を見直す必要があります。その見直すことを「^{ととの}調う」としてみました。今回の東京お台場の地で、研究や実践で培った知恵や技法を集め、またそれぞれの現場に持ちかえていただくことで、今後の精神科リハビリテーションの糧になっていただければ幸いです。

主催者一同、皆様方と東京お台場にてお目にかかることを楽しみにしております。



第31回 日本精神障害者リハビリテーション学会

東京お台場大会

<開催概要>

学会名称 日本精神障害者リハビリテーション

学会 第31回東京お台場大会

テーマ 多様性と調和 ～台場シティで調^{ととの}う～

会期 2024年12月14日(土)～15日(日)

会場 東京有明医療大学(〒135-0063 東京都江東区有明2丁目9番1号)

参加者数 約1,200名

開催目的 本会は精神科リハビリテーション学に関する研究発表、連絡、提携、及び研究の促進を図り、これらの進歩、普及に貢献することを目的とする。

ホームページ : <https://www.ksi21.com/japr31/>

大会長 肥田 裕久(医療法人社団宙麦会ひだクリニック 理事長/院長)

副大会長 角田 秋(東京有明医療大学看護学部看護学科 教授)、佐々 毅(医療法人社団宙麦会ひだクリニックお台場 院長)

実行委員長 中田 健士(株式会社 MARS 代表取締役)

主催 日本精神障害者リハビリテーション学会
事務局(主催者) 株式会社 MARS 担当: 向谷地・角田 〒270-0163 千葉県流山市南流山 1-14-7-204 E-mail: japr31tokyo.odaiba@gmail.com

運営事務局 共立速記印刷株式会社 担当: 五十嵐・中澤 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3-11-24 TEL: 03-3234-5511 FAX: 03-3263-2740



梨のドリーちゃん ピーナツのホークン
ひだクリニックがある千葉県の特産物、
梨とピーナツが夢(Dream)と希望(Hope)を
叶えるための応援をしようと誕生しました。

4/1(月)～

参加登録
一般演題
WS・自主企画

募集中!!



大会公式 LINE アカウント

すべての情報へアクセスできます。
ぜひお友達登録ください!

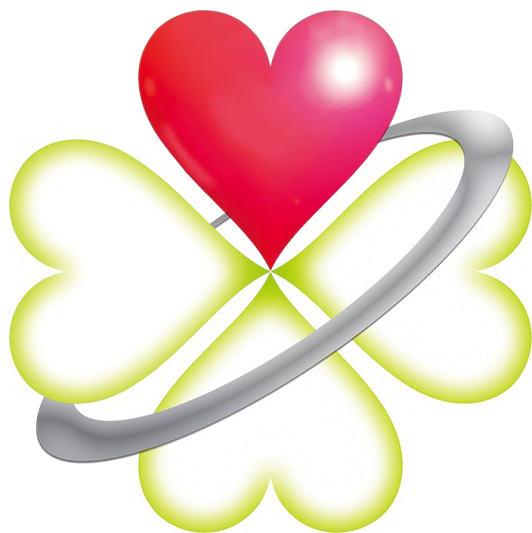


04 / 学会ロゴマーク制定のご報告

広報委員会

ロゴマークについて

当学会ではプロジェクトチームを設置し、公募によりロゴマークを作成しました。応募された図案はプロジェクトチームにより一次審査し、会員投票により最終審査を行いました。その結果以下のロゴマークに決定し、2023年12月2日(土)～3日(日)に行われた第30回岡山大会にて、ロゴマーク制定報告と図案作成者の表彰が行われました。



(図案 吉村 公一)

心を4つ集めてクローバーを表現しています。赤色の葉は精神障害者の方、他3枚の葉は医療・保健・福祉、周りの輪はシルバーリボンを表しています。赤色の葉にある白い丸はクローバーの花で、花が咲く=成功体験や喜び、を表現しています。クローバの花には「幸せ」、4枚の葉には「愛・健康・幸運・富」の意味もあり、その一つひとつを精神障害者の方が感じることができるとを願います。

ロゴマーク作成のプロセスについて

ロゴマーク制定報告

ともに創る、ともに暮らす

日本精神障害者リハビリテーション学会
Japanese Association of Psychiatric Rehabilitation

<ロゴマーク作成プロジェクトチーム>
 後藤 雅博 医療法人崇徳会こころのクリニック フィズ
 大川 浩子 北海道文教大学 医療保健科学部 リハビリテーション学科
 鎌田 勉丸 神奈川立山保健福祉大学 保健福祉学部 社会福祉学科
 千葉 理恵 京浜大学大学院 医学研究科
 矢野 遼志 一般社団法人北海道ピアサポート協会
 佐枝 洋平 医療法人慈和会 大田病院
 大石 甲 障害者職業開発センター 研究部門

ロゴマークの公募と審査について

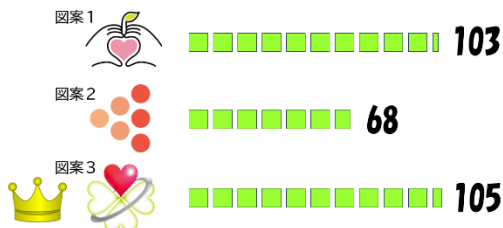
- ・学会ロゴマークを公募
- ・募集期間 2022年11月1日～2023年4月1日
- ・応募資格
 - ・当学会の会員（正会員または賛助会員）または正会員が所属する機関や団体に精神障害者のリハビリテーション活動を共にする者
- ・審査方法
 - ・一次審査 ロゴマーク作成プロジェクトチームにより審査
 - ・最終審査 会員投票により審査（2023年10月10日～10月31日）
- ・最終審査で第1位となった図案を当学会のロゴマークとする

応募ロゴマーク

- ・23図案の応募がありました
- ・一次審査により3つの図案を選出
- 最終審査（会員投票）へ



最終審査（会員投票）の結果



お知らせ

理事選挙結果について

日本精神障害者リハビリテーション学会 2024 年度～2026 年度期理事選挙の結果について、学会 HP に掲載しました。<https://japr.jp/membersonly/academic-journals/> (会員ページ)

立候補・被推薦者を合わせて定数 20 名となり、「理事の選出に係る手続き」の「7. 立候補者が定数だった場合の対応」に基づき、候補者全員が次期理事となりました。

来年度より新体制での学会運営になりますが、会員の皆様におかれましては、引き続き、本会の運営にご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。



News Letter

VOL.63

2024 年 03 月発行

日本精神障害者リハビリテーション学会

【事務局】

〒115-8560 東京都北区赤羽台一丁目 7 番 11 号

東洋大学福祉社会デザイン学部 WELLB HUB-2 20901 研究室 (吉田研究室)

<https://japr.jp> Mail : japr.jimukyoku@gmail.com